

なれています。隆夫たちは十六か七です。村上は兄貴分です。

だが、現場の評判は最低でした。

彼の仕事の一つは現場の送りむかえです。

それを度々放棄するのです。

この男だけが通勤ですが、西宮の自宅から尼崎に寄って小型乗用車をマイクロボスに乗り替え、鼓ヶ滝を通り過ぎて飯場に来て仲間をのせて現場に出ます。帰りもその逆のコースです。

ところが遅刻が多いので、仲間たちは朝から歩かされるのがしばしばです。

飯場から鼓ヶ滝の現場まで徒歩で約四十分かかります。

「西宮からだ朝が早いからしんどい」

と、こぼしますから

「多田の飯場へ泊りこめばいいんや」

と言うと、

「それは……」

厭なのです。

遅刻だけならともかく、マイクロボスでなく、小型乗用車や、小型ダンプで来ることも多くて、それだと人員に制限があるから、現場からの帰りも歩かされます。

「四人位なら乗れるから」

と言います

「残った者はどないすんねん」

「もう一往復するよって、待っててや」

「馬鹿にするな。もう二往復せんと全員乗られへんやないか」

「そんなに待たされるんやったら、歩いた方がましや」

「何時になると思ってるんや」

口々に文句を言われても

「そないに時間はかからへんて」

とケロリとしていますから

「アホくさ、歩こう、みんな歩こう」

と腹を立てて、全員が歩き出す背中へ

「そない言わんと、四人は乗れるよって」

と、小さな声で言いますが、みんなの姿が見えなくなると

「ああ助かった。飯場へ寄ってたらおそくなるからかなわんのや」

監督と打合せのために現場に残っている私の前で、平気でぼさくのです。

それが一度や二度ではありません。

平山親父が現場にいないと、そういう横着が、なおひどくなります。

せん。

みんな呆れ返っています。

村上というのはそんな男です。

陰口だけで袋叩きにはあっていないと言いましたが、

陰では誰かがこの男をなぐっていないという保障はありません。

(昨夜何かあったぞ)

と思った私の想像は、すぐそのことに結びつきました。

(昨夜、尼崎で誰かになぐられたんじゃないか。その位のことはあり得る)

しかし

(今日だけならともかく、ずっと休まれると困るぞ。あんな奴でも員数だからな)

なのです。

フト、昨夜、尼崎へ行ったのは隆夫だけでないことに気づきました。松本の古顔で三宅という男もその一人です。その三宅に聞いてみました。

三宅はニヤニヤ笑っていました。

「敏夫になぐられたんや」

「敏夫がなぐった? どうしてまた」

敏夫は三人の従兄弟の中では、一番体格もよく、力も強いのですが、めったに喧嘩をするような子ではありません。



せん。

これが隆夫なら判ります。隆夫は非力なくせに向う見ずで相手かまわず喧嘩をふっかけます。欲求不満のかたまりのような子なのです。

しかし、隆夫が相手なら村上も一方的になぐられてはいないでしょう。

するとやっぱり、それにしても

「敏夫と村上と喧嘩したのか」

「いや、村上が敏夫になぐられたんや」

敏夫は多田へ来るのを嫌って、両親と離れて尼崎に残っていました。

交通も不便、娯楽施設も皆無という田舎暮らしは想像するだけでも耐え難かったかのようですが、それとは別に、両親の束縛から離れて自由に暮してみたいという、あの年頃らしい願望もあったのでしょう。

その敏夫を

「村上が初島へ連れて行ったんや」

と、三宅が言うのです。

初島というのは「元赤線」で、売春防止法以後も営業を続けていました。現在ではすっかりなくなりましたが、その頃はまだ昔の名残りをとどめていたのです。

「オイオイ、敏夫はまだ十七だぜ」

「いや、もう十七や」

判りません。

近ごろ、平山姐御がひんばんに敏夫に電話をして、多田へ来るように口を酸っぱくしている理由も判りました。

その電話を敏夫が逃げ廻っている理由も判りました。

それにしても、飯場の兄ちゃんたちに宿題を見てもらっていたのは、ついこの間のことだったのに——と、私も複雑な気持ちでした。

村上はその事件のあと、休む日がふえました。それは敏夫にどづかれてすねているだけでなく、彼自身の結婚式が十二月月上旬ということで、準備に忙しかつたせいもあります。

何も押しつまった十二月に結婚しなくてもと思います。が、何しろ本人が一風変わった男ですし、何か事情もあったのでしょう。

村上が休むとワリを食うのは隆夫でした。

尼崎から代りの者が来ないので、隆夫がブルの運転をしなければなりません。隆夫は重機見習いなのです。

高校進学をあきらめて、重機見習いになった隆夫は、高校を中退して同じことをしている敏夫や和幸より少しばかり先輩です。

その少しばかり先輩という点が、隆夫を少しばかり得意にしています。ナニ、少しばかりは少しばかりで、

まだ、と言うべきか、もう、と言うべきかは議論の別れ目ですが、そこにこだわってはいは話が前に進みません。

「それがどうして喧嘩になったんや」

「そこで敏夫が病気をもらってもうたんや」

「おやおや」

「これは親には言われん病気や」

「当り前だ」

「こつそりマイシンを打ったんを、誰も知るまいと思つたら、姐御にバレて、こつびどく叱られよった」

「誰がそんな余計なことを姐御に言つたんだ」

「替ちゃんかてそう思うやろ。病気のことを知っているのは、村上と隆夫と和幸の三人だけや。敏夫が一人一人聞いてみたら、村上の収が白状しよった」

「だって村上は初島へ連れて行った張本人じゃないか」

「そや、その村上が姐御にすっかり告げ口しよったんや」

「何て無神経な……」

「アホや。それが昨夜判って、敏夫からどづかれたわけや」

「成程」

それでいきさつは判りましたが、そのことが今日の休みにどう結びつくのか、村上みたいな奴の心算は私には

五十歩百歩の遠いのですが——。

得意になるほど技術に差があるかというのと、それはないので。

隆夫という子は、体力も知能もそれほどでもないのに負けず嫌いというか、自尊心だけがヤケに強いのです。

村上の仕事が隆夫に廻ってくると、隆夫は得意になりました。多田のオペレーターはオレ一人や、オレがいなければ、オレこそ、オレは、という気持ちなのです。

しかし、見習いは見習いで、仕事をさせて見るとヘマばかりです。

わざわざ石灰で直線を引いてある布摺りが、隆夫の手にかかると「へ」の字や「く」の字になってしまいます。見かねて、土工の明田が

「ドレ代ってやろ」

とブルに乗ったりします。

古顔の三宅などに怒鳴られます。

平山親父にかかったら

「アホ、スカタン、どこへ目をつけとんや」と怒態の連発です。

それが隆夫の自尊心を傷つけます。

「オレが悪いんやないんや」

ブルの調子が悪いんやであり、土が硬すぎるんやなの



です。井解の見つともなさに気づくどころか、食ってかかるような口答えをします。

自分の技術の至らなさに気づけばいいのですが、

「何でみんなオレばかり……」

と、人を恨む気持ちしかありません。

(七)

給料日の翌日の夜更けに

「西宮に行く」

と言つて出て行つたままになつていた平山親父は、五日目にもどつて来ました。

息子の敏夫は相変わらず尼崎です。

翌々日ぐらゐに村上が来ました。

隆夫がさぞかし、ホツとしただろうと思つたら、それでもなかつたようです。

村上もぐうたらな男ですが、ブルの運転技術では、見習いの隆夫よりはまします。

隆夫は「しょうもないガキ」にすぎないのですが、村上は「他に人がいないんだから我慢しよう」という程度

です。

多田の現場では「もっとしつかりしたオペレーターが欲しいの」のですが、「隆夫よりましだから村上で」辛抱しようというところなのです。

隆夫にしても「アホ」とか「スカタン」とか言われずにすむわけです。村上が来てくれて助かつた筈です。

ところがその日、仕事が終わって飯場へ一たん引上げてから、村上和隆夫が取っ組み合いの喧嘩になりました。

原因は判りません。

私は一日中、みんなと離れて測量をしていましたから、現場で何かあつたにしても気づきません。

早目に食事をすませて日報を書いているとき、飯場の裏でドンパタンと立ち廻りが始まつたのです。

飛び出してみると、平山親父と三宅が二人を引離していました。二人とも止め男の太い腕にかかえられて、身動き出来ないまま、それでも口汚くのしり合い、敵意を向き出したすごい形相でにらみ合っています。

オペレーターとその見習いであり、ハトコ同士であり、毎日西宮へ帰る村上の車に隆夫がちよく同乗して行くのを見えていますから、この二人は仲好しなのだと思います。こんでいた私には、想像もつかない光景でした。

三宅が原因をたずねましたが、二人ともそれには答え

ません。

ただ、平山が

「お前たちはいつかこりなると思っていた」

と、嘲けるように笑つて言っていましたから、私などには判らないところで、この二人は根深い反目があつたのかもしれない。

やがて村上は西宮へ帰りましたが、その翌日からまた、仕事に出て来ません。

年下で、見習いの隆夫が、村上から放り出されたなら判りますが、年長の村上の方がすねてしまうのですから、どうしようもないというより仕方がないのです。

それから二、三日して、帳面を合わせて尼崎に行きました。

用事がすんでから、私は松本親方に進言しました。

「村上は休んでばかりで困ります。隆夫はまだ未熟で仕事になりません。明田も少しはやりますが、彼がブルの運転に廻ると土工の仕事が差し支えます。ブルの運転手を一人入れて下さい」

親方はいつもの苦虫をかみつぶしたような表情で「判つてる」

と一言だけです。あとはウンでもスンでもありません。

「では帰ります」

と立ち上りました。親方の部屋を出ると渡部が待つていて

「皆ちゃん、寄つて行かないか」

左手で指口を持つ形をして、ニヤリとしてみせました。

(何か話があるんだナ)

そう察して彼の部屋へ入って行くと、大柄で快活な妻君が、チャブ台にウイスキーとつまみを並べて待つていました。

この夫婦は私より年長ですが、渡部は東京生まれ、妻は横浜生まれで、私もその近くですから、そういう意味でも気があいます。

想像したような格別な話はなくて、世間話みたいなおしゃべりで時がすぎました。

その何気ないおしゃべりの中で

「隆夫にも困つたものだナ」

と、渡部が言い出しました。

「まあね。しかしまだジャリだよ」

「それはそうだがね。あいつまたヘタうちやがつたんだ」

先日の喧嘩のことが、もう尼崎に知れたのかな、と思つたのですが、私はそのことを誰にも話していませんし、村上自身が言わなければ尼崎では知る筈はありません。